老いの散策『学ぶ脳』への道

①

伊藤　眞作

この文は、自著『またとない今を悔いなく生きよう』（株・メディアドゥ発行）の関連などから始まった随想のシリーズである。天命をよそに別にすれば、この始まったシリーズだけでも、四年ほどはある。絶筆まで、ここを自分の死に場所と決め、老体にふさわしい歩幅とテンポで、枠を超えた散策の第一歩を、いま、ここに印す。

一、序章

『またとない今を悔いなく生きよう』の読者の方へ

（A）出版の狙い

アインシュタインのおかげで、宇宙が膨張の最中にある事は遍く知られている。

しかし、今後の宇宙の行く末については、相対立する学説が二つ在り、現時点では双方とも優劣つけ難く、相争っている処である。

ひとつは、この宇宙は、どんどん膨張を続けて発散して、ついには、ゼロになってしまうという学説。もうひとつは、今後、ある程度の大きさになり、忽ち収縮に転じ、やがては一点になってしまい、再びビッグバンが発生し、永遠にこれを繰り返すという学説である。つまり、宇宙は、一点になるかゼロになるかに過ぎない。

また、太陽も膨張を続けている。太陽は人間で言えば２０歳ぐらいだが、今後どんどん大きくなり、地球の軌道位になり、ブラックホールになり、大爆発を起こし、死を迎える。

また、地球上も、気温上昇がやまず、平均セッ氏４度の上昇があれば、極端な食糧難のため、世界人口の半分近くが餓死する、と大騒ぎである。だから、この世にあるものの一切で「永遠」と言い切れる物は何もない、と私は信じている。神や仏については、あまり詳しくないが、仮に、地球が、巨大ブラックホールのゴミとなった時、それらがどうなってしまうのかは、それらの人に確かめて欲しい。

唯一「確か」だと断言出来るのはただ一つ、自分が「またとない今を」ここにこうして生きているという厳粛な事実である。それでは、生きているとは何か。

「生きているとは、死に対して具体的に、勝利した結果である」

本来ならば政治は、これらの人々を祝福し、更に援助を強めるべきではないか。

その為に我々は、議員を選んだのに、あくまでも「自己責任」を押しつけ、「在宅死」を強要して、平然と構えている。その最大の原因であるベッド数を減らし、病院の統廃合を勧める。自粛は言うが補助金は出さない。

あの竹中平蔵はワトキンソンと共に「中小企業を潰して半分にしろ」と絶叫する。

それらの金を「台湾防衛」と「敵基地攻撃能力」をあげるために使う。バイデンのご機嫌取りだ。まるで軍隊ではないか。

今、台湾近くには、米、英、独の艦隊がひしめく。これに参戦しようとする日本は、自衛隊員だけでは人数が少な過ぎるので、憲法を改悪し、国民皆兵を施行しようしと、岸田は必死である。いつも、戦争は外国の防衛からだ。

もし、これに成功すれば、戦争は避けられない。中国は、日本に５０基以上ある原発に、一斉に通常ミサイルをブチ込むだけで日本列島は「３・１１の日本列島」と化し、核を用いずに、一瞬にして日本列島は、死の島と化す。

なぜ、中国に「国連憲章を守れ」と、「世界人権宣言を守れ」と平和交渉が出来ないのか。理由は簡単だ。

戦争をすれば必ず、金儲けが出来るからだ。軍需産業の強い要請があるからだ。資本主義は、コロナのお蔭で、これ以外に活路が無くなったのだ。コロナ患者の数は、すでに三億人（米ホプキンス大学２０２０年１月１１日）を超え、更に、オミクロンの大流行が開始された。いつ我が身なのか。

大部長くなったが、結論を言う。

今ほど、生命が、世界的に軽んじられている時はない。だから、せっかく「またとない今を」生きている人々は、これらの死と闘い抜き、生き続けようではないか。皆で総力を合わせ、ここを乗り切ってこそ我々に新たな世界が訪れるのだ。

誤解を解くために付け加えておけば、この文は、ヒトラー、スターリン、毛沢東、習近平、資本主義にもざらにいるが、日本でも、安倍、菅、岸田などそのとり巻き連中の為に書いた文ではない。逆に、これらのため、現在苦しめられている「今」を体験している、全ての人に読んでもらいたくてペンを執った文章であ

ることを、ここに明らかにするものである。
家族の協力なしに、この文は無かった。「ひとを助けるとは己を助ける事」と知った。

二、ジャクソン・ポロックの「インディアンレッドの地の壁画」および、現代抽象画、コンピュータ絵画、の鑑賞のために

（Ⅰ）の段階

その絵は、私の傍らにそそり立って居た。その存在感に、つい威圧されてしまう。さっきから、この絵画からは立ち去りたくない。これは普通の抽象画ではない。表面だけ小綺麗に纏った、売りたいがための他所ゆきの顔ではない。むしろ、他人を遠ざける表情さえ明らかに示している。だからこの絵画は、ある派の層を意識的に嫌悪に排除している。逆に表現すれば、それに敵対する派からは熱烈に歓迎される。言わばその人々にとっては、守護神に違いない。大衆的に「もの」を表現する中核をなす、いわば思想の階級性に優れた数少ない抽象絵画家である。具体的には、後に行くに従って、どんどん具体的になる。
この大切な思想闘争に敗れ、とうとう、すっかり変質しまい、作品もろとも「歴史の藻屑」に成り果てた。いわば、芸術家クズレのいろんな例が『近代人の疎外』（パッペンハイム・岩波新書）にある。ご一読をお勧めする。芸術、マスコミ、宗教、政治などの裏が解る。
しかし、言っておくが、これは（Ⅲ）に進んでから、具体的にはやっと認識できる(＊)筈なのだが……。
では、いつになったら、この絵画の前を立ち去るべきであろうか。
それは、この絵画の持つ独自の表情、再言するならば、この絵画は、全人類の為に描かれたものではないことを知り、見当の方向がかすかにでも掴め始めればいい。題名は捨象してかまわない。いわば、禅宗の「隻手の声や如何に」と問うことにより、常識的判断を乗り越えさせる為に行なわれている一種の方便に過ぎない。殊に、ジャクソン・ポロックの急死の結果、友人の詩人が名付けたものが殆どなのだ。だから「インディアンレッドの地の壁画」を、ポロック自身が考えていたという保証は、まずあり得ない。確かなことは、あなたが題をよそに、直接画布と向き合い、画布から直に知り得る「息遣い」あるいは「間」、「呼吸」

というか、あるいは「脈拍」というか、とにかく、この絵画に固有の生命、とにかく「この絵画は生きているんだ」と感得するまで、絵画の傍らに立ち尽くすことだ。

（Ⅱ）の段階

ここは非常に単純だ。誰にでも、スグ出来る。あの絵画を見終ったら、グズグズせずに、忽ち帰路につく事だ。見残した作品まで巡ってしまうからいけない。まず作者を忘れなさい、次に題名、次に画面を……、つまり、すっかり初期化してしまうこと、あの絵にまつわる一切を忘れることだ。あの絵画の思想のレベルを自らの脳内で発酵(＊)させるために必要不可欠な時間であり、「固有の周期」(＊)を持つ。だから、その瞬間までは、あの絵画、画家も流派も忘れ、完全に自らの日常に埋没してしまうことだ。

先ず階段にぞうきんを掛けたり、お客様に商品を説明したり、ひたすら「ぼんやりする」(＊)ことだ。

（Ⅲ）の段階

いつか、ある瞬間、忘れていた筈のあの絵画が、その具体的内容どころかその価値観迄も整えて、いわば、あなたにとっての思想的階級性も備え乍ら、その全身を惜しげもなく晒す(＊)。ここに絵画鑑賞の醍醐味が存在する。

あのピカソも言った。

「決して捜すな、発見せよ!!」と。

その訪れが来なかった時には、その絵画は、あなたとは無縁の存在であったのであり、その絵画は、あなたにとって無縁な存在であっただけに過ぎない。

あなたが知らなかっただけに過ぎなかかったもう一人のあなたが、あなたの目の前に実在しているのだ。マルクスは「資本論」の中で、「商品Ａは自身の価値を、向かい合う商品Ｂの姿を借りて表現している」旨、書いている。それにフロイト深層心理学の「ロールシャハパターン」にしても、あるいは、リーマン幾何学の測地線上の遠点、などなど考え出せばきりがない。しかし確かなのは、それがあなたのほとりにあることだ。

いずれにしても、もう一人のあなたは、この世に実在する。それを発見する事も、あなたの人生の重要な一部である。人生観を一変させてくれるのだ。それは、絵画ではないかも知れない。アンテナを広く張りつゝ、日々生き続けようではないか。